



ほんじゅく

令和8年度の教育活動について

校長 越前 信

校庭に咲いた桜の花の中にも、少しずつ若葉が息吹き、春の訪れを感じます。本年度の本宿小学校は、新入生 41 名を迎え、全校児童 341 名、全 12 学級でのスタートです。少し大きめのランドセルを背負った新入生の期待に満ちた表情、進級した在校生の誇らしげで、どこか引き締まった表情など、その一つ一つが、本宿小学校のかけがえのない宝物です。さて、本年度の教育活動についてお伝えします。

■「元気な子」のその先にあるもの

今年度も引き続き「一人一人が力を伸ばし、共に育つ」という「はとの子教育ビジョン」を掲げ、学校教育目標の重点を「元気な子」としています。本校が目指す「元気」とは、単に体が丈夫であることだけを指すではありません。自分の良さを認め、他者の個性を尊重し、自分らしく輝きながら、未来を切り拓いていく心の力。それこそが、経営理念である「本宿小のウェル・ビーイング (Well-Being)」です。子どもたちが生きていく社会は、正解のない問いに満ちています。その中で幸せに生きていくためには、知識を広げるだけでなく、自分を信じる力(自己肯定感)、自分ならできると思う力(自己効力感)、そして自分は誰かの役に立っていると感じる力(自己有用感)を育むことが何より大切だと考えています。

■「対話」が変える、教室の雰囲気

日々の学習で、多様性のよさを生かしながら合意形成していく活動を大切にしていきます。昨年度、あるクラスの「学級の時間」では、学級レクのプログラムについて意見が割れたことがありました。活発に外で遊びたい子と、教室でゲームをして過ごしたい子。かつてなら、多数決で決めていたかもしれませんが、しかし、子どもたちは「どうすれば、みんなが楽しく過ごせるかな?」と対話を重ねました。一人の児童が「時間を区切って両方をやろう」「別の日にできるか、先生に聞いてみよう」など、自分の意見を押し通すのではなく、相手の思いを想像し、折り合いをつける場面がありました。その過程で、物静かな子がポツリと言った「みんなの笑い声が聞こえることが大切」という言葉に、クラス中が温かな空気に包まれました。こうした、対話の積み重ねこそが、多様な価値観を認め合う土壌を作っていくのだと改めて感じました。

■命を育む「食」と、五感で学ぶ「探究」

本校は、自校給食になります。給食室から漂ってくる香り、調理員さんが心を込めて料理している姿。これらは、子どもたちの五感を刺激し、豊かな心を育みます。栄養士や調理員と連携した「食育」の授業では、野菜の皮むきや箸の持ち方指導、三大栄養素について学ぶ活動を通して食への関心を高めていきます。「いつも美味しいごはんをありがとう。」「苦手な野菜も、みんなで励まし合って全部食べたよ。」など、調理員さんとの交流も見られます。こうした交流こそが、生きた教育だと思います。今年度も、世界のメニューやリザーブ給食を通じて、食への感謝と喜びを深めていきます。また、ビオトープやグリーンベルトを活用した体験活動で子どもたちの好奇心の芽を大きく育てていきます。そして、地域と深くつながる「武蔵野市民科」などの探究学習やセカンドスクール等の宿泊学習を通して、社会参画意識や自己理解・他者理解の芽を育てていきます。

■誰一人取り残さない支援

「誰一人取り残すことのない学校」を目指しています。時には少し苦しく感じられる時があるかもしれませんが、そんな時には通級指導学級「はなみずき教室」や個別支援教室「さくらルーム」、そして不登校児童一人一人のニーズに寄り添う「学習室」があります。そこは自分の課題や気持ちに向き合い、生活へのエネルギーを充電する場所です。学校は、ただ教科書を学ぶ場所ではありません。一人一人の歩幅に合わせ、時には立ち止まり、時には手を取り合いながら、共に成長していく場所です。巡回心理士やスクールカウンセラー、市派遣相談員とも連携し、組織的な支援体制を整え、一人一人の個性に向き合っていきます。

■共に育つパートナーとして

子どもが自己を実現する過程においては、迷い、悩み、立ち止まることもあります。そのような時、学校、家庭、そして地域が手を取り合うことで、子どもたちの未来を大きく照らすことができます。毎日の学校生活が子どもたちにとってワクワクする冒険の連続であるように、教職員一同、チーム本宿小として教育活動を進めてまいります。保護者・地域の皆様のご理解とご協力の程、よろしくお願ひします。